

10. 地名として残る「鎌倉道」

16世紀以降、主要道としての道の利用は東側の大類の交差点から南北に延びる道（八王子街道）に譲った鎌倉街道は次第に道の機能を縮小していきました。

そのため、明治次時代の「迅速測図」では人が通れるほど細い道として表記されるほど、鎌倉街道の道としての利用価値は低下していましたが、当時の人々は、この道がかつて主要な幹線道路であったことを伝ようと、

地名として「鎌倉道」の名をつけて残しました。

毛呂山町には、このほかに、鎌倉街道につながる細い東西方向の横道に対して伝承「鎌倉街道」と伝わる箇所が存在し、鎌倉街道を人々が往来した往古の賑わいを伝えています。

11. 遺構が良好に残る

「鎌倉街道掘割遺構」（鎌倉街道A遺跡）

社会福祉施設の南東の鎌倉街道A遺跡は埼玉県内の鎌倉街道のなかで最も保存状態の良い「掘割遺構」を見ることができます。地表面においても、「掘割」の形状を広く留めていることがわかりますが、地中では道幅2.8～3.2mの道両側に側溝が掘られていた中世の道路遺構が、当時の姿として埋設しています。

毛呂山町の鎌倉街道は国の史跡指定を受けましたが文化庁が国の歴史に関わる重要な交通遺跡を選定した「歴史の道100選」に寄居町、小川町の鎌倉街道上道遺跡とともに名を連ねています。

また、昭和56年（1981）に埼玉県教育委員会が「歴史の道調査事業」の一環で行った掘割遺構の発掘調査は、毛呂山町を通る鎌倉街道において最初の試みであり、鎌倉街道研究においても重要な役割を果たす調査となりました。



掘割遺構調査の様子

12. 高麗川河岸の掘割遺構

「仏坂遺跡」の街道跡

県道川越・越生線の南側にも現在の町道の下に街道跡が保存されています。

仏坂遺跡の街道跡は台地から高麗川に向かう地形の変換点にあたり、掘割の形を見ることができます。街道跡の西側にかつて三島社といわれた市場神社が鎮座しています。市場の由来は九の日に市が立ったことによります。対岸の四日市場と合わせて六斎市が開かれていたと伝わっています。



仏坂遺跡掘割遺構の様子

発行 毛呂山町歴史民俗資料館 令和5年3月

住所 〒350-0432 埼玉県入間郡毛呂山町大類 535 番地1

電話 049-295-8282 毛呂山町歴史民俗資料館のホームページはこちら→



国指定史跡

鎌倉街道上道のしおり

※番号は地図と一致します

鎌倉街道とは・・・

鎌倉時代に幕府が置かれた鎌倉と関東の諸国や信濃、越後、陸奥方面を結ぶ幹線道路です。このうち、毛呂山を通る街道は、上野国（現在の群馬県）を抜け、信濃国（現在の長野県）に至る「上道（かみつみち）」と呼ばれています。

鎌倉街道の特徴

台地や丘陵から急傾斜な河岸段丘の崖線を下る場所において、地面を掘り下げ、傾斜の緩やかな道を形成する「掘割（ほりわり）」工法が採用されています。



掘割遺構の発掘調査風景



市場地区の鎌倉街道掘割遺構

1. 鎌倉街道に敷かれた石（鎌倉街道B遺跡）

鎌倉街道を調査していたところ、街道の一部に石が敷かれていることが判明しました。石敷は、堂山下遺跡の中では発見されず、崇徳寺跡方面にも延びていることから、街道と宗教的な空間を結ぶものと考えられます。

鎌倉街道の石敷遺構



2. 諏訪の森の庚申塔

鎌倉街道に面した塚の上には、「諏訪の森の庚申塔」と呼ばれる町内で2番目に古い庚申塔が建っています。

江戸時代の「庚申信仰」を伝える庚申塔の多くは、青面金剛像を彫ったものがほとんどですが、町内には「諏訪の森の庚申塔」のような文字のみを刻んだ庚申塔や阿弥陀如来像を彫った庚申塔もあります。庚申塔をはじめとした石仏や石造物は、江戸時代に道沿いに建てられることが多く、人の目を引きました。

そのため、鎌倉街道沿いにもたくさんの石仏、石造物があると思われがちですが、町内の鎌倉街道沿いには、石仏、石造物はほとんど見かけません。江戸時代の地誌『新編武蔵風土記稿』には、鎌倉街道について、「古道」と表現されることがあります。鎌倉街道が、江戸時代には主要な交通路から外れたことが、街道沿いの石造物造立の少なさに繋がったとみられます。



諏訪の森の庚申塔

延宝4年(1676)

【文字塔と三猿】

3.河岸段丘の崖線から湧き出る湧水

諏訪の森の庚申塔の東の崖線では、土層の境目から常に水が流れ、泉を形成しています。その上には、かつて水を司る諏訪社が祀られていました。鎌倉街道周辺は地下水位が高く、降雨の折には雨水が地中に浸み込むにくい環境です。そのため、道路遺構には、側溝の整備が必要不可欠であったものと考えられます。崖線は、東の大類地区の十社神社のほうまで延びており、神社の北側の崖線でも同様の湧水がみられます（3-Bの地点）。

4.渡河点の（宿）「堂山下遺跡」

鎌倉街道と越辺川がぶつかる場所には、街道をはさんで東西に鎌倉時代から室町時代にかけての集落（苦林宿）が形成されました。集落からは、溝で囲まれた建物群や井戸跡、土坑群などの遺構が発見されました。また、日常の調理器具である土製の鍋とともに、東海地方産の陶器、北九州産の石鍋、中国産の青磁など遠隔地との交渉の物語る資料も発見されています。



堂山下遺跡出土の土釜（左）と内耳鍋（右）

5.越辺川の河道と鎌倉街道上道が渡河する場所

毛呂山町の北側を流れる越辺川は、蛇行の著しい河川で、川幅は5mから25mほどあります。

現在は、大類グラウンドの北側で河川が北向きに流路を変えていますが、河川の整備が進む以前の明治時代には、現在川の北側ある大学のグラウンド付近を流れていました。

明治時代に陸軍により制作された地図「迅速測図」を見ると、現在の越辺川の河道部分には鎌倉街道から延びる細い小道が確認できます。

鎌倉街道の渡河点については様々な説がありますが、中世の人々も水深が深くなる梅雨時や台風に見舞われた折には、苦林宿に足を留めたものと考えられます。



かつては小道が通っていた場所を流れる現在の越辺川河道

6.大型の板碑「延慶の板碑」

埼玉県をはじめとした関東地方には、小川町の山間や長瀬町の河川近くから産出される「緑泥片岩」と呼ばれる板状に加工しやすい石を用いた石製の塔婆が数多く存在します。延慶3年（1310）に建てられた「延慶の板碑」は、毛呂山町に残る大型板碑の一つで、平安時代の木製の板碑の形状的な特徴を良く残す一方、その根元から蔵骨器が出土したことから供養塔としての役割をもっていました。鎌倉街道周辺や大類地区は毛呂山町のなかでも、大型の板碑が多く伝わる地域です。



延慶の板碑

7.板碑が並び建つ中世墓の遺跡「崇徳寺跡」

崇徳寺跡は、かつて「延慶の板碑」が建っていた場所で、古くは「阿弥陀堂」、「堂山」と呼ばれていました。延慶の板碑の移転にともなう調査から4回の調査を経て、

①13世紀後半から15世紀後半の板碑が造立されていた。

②火葬跡が確認されている。

③自然石で板碑の根本を押さえて建てたり、緑泥片岩の台石に差し込み板碑を建てていた。

④板碑造立の終焉とともに板碑は、墓群同士の間に掘られた溝に埋められた。という遺跡の特徴や変遷が分かってきました。



崇徳寺跡のようす

8.中世の旅人も眺めた「川角古墳群」

堂山下遺跡の南から北西にかけて広がる林の中には、高さ2mほどの塚をいくつも見ることが出来ます。これらは、6世紀後半から7世紀にかけて造られた「古墳」です。

毛呂山町の越辺川沿いには、100基近い古墳が存在しますが、鎌倉街道沿いに位置する川角古墳群では、石室から副葬品とみられる刀や装飾品が見つかり、古代の権力者の墳墓として特徴を示す一方、もともと円形だった墳丘の一部削平した古墳もあり、その墳丘上からは中世の土器片や板碑が出土するものもあります。

中世の人々も、古墳を先人たちの眠る墳墓として神聖視していたものとみられますが、それらを自分たちの墳墓群に組み込む、また集落の南に分布する古墳群を集落の内と外を隔てる境界としたとも考えられます。

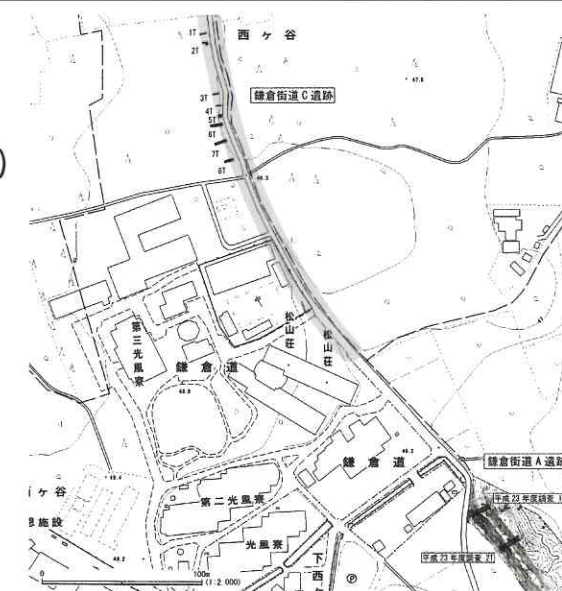


武士の名「寺村頼資」が記された板碑が出土した川角15号墳

9.毛呂山の鎌倉街道で最も標高が高い場所(鎌倉街道C遺跡)

県道川越坂戸毛呂山線の南は鎌倉街道C遺跡です。途中、太陽光発電施設が街道の西側に広がりますが、この周辺が毛呂山町を通る鎌倉街道の区間のなかで最も標高が高い箇所、標高は48.8mあります。この標高は、堂山下遺跡の北端とは約9m、掘割遺構地点とで3.2m、高麗川の河岸段丘下で5mほどの高低差があります。

道の勾配があまりに低いため、実感することは難しいかと思いますが、この地点を境に鎌倉街道は南北の河川に向かい傾斜しています。



字「鎌倉道」の周辺と掘割遺構